

「主」ではないが、主から遣わされた者

第一朗読（士師記2章11―19節）

11 イスラエルの人々は主の目に悪とされることを行い、バアルに仕えるものとなった。12 彼らは自分たちをエジプトの地から導き出した先祖の神、主を捨て、他の神々、周囲の国の神々に従い、これにひれ伏して、主を怒らせた。13 彼らは主を捨て、バアルとアシュトレトに仕えたので、14 主はイスラエルに対して怒りに燃え、彼らを略奪者の手に任せて、略奪されるがままにし、周りの敵の手に売り渡された。彼らはもはや、敵に立ち向かうことができなかった。15 出陣するごとに、主が告げて彼らに誓われたとおり、主の御手が彼らに立ち向かい、災いをくだされた。彼らは苦境に立たされた。

16 主は士師たちを立てて、彼らを略奪者の手から救い出された。17 しかし、彼らは士師たちにも耳を傾けず、他の神々を恋い慕って姦淫し、これにひれ伏した。彼らは、先祖が主の戒めに聞き従って歩んでいた道を早々に離れ、同じように歩もうとはしなかった。18 主は彼らのために士師たちを立て、士師と共にいて、その士師の存命中敵の手から救ってくださったが、それは圧迫し迫害する者を前にしてうめく彼らを、主が哀れに思われたからである。19 その士師が死ぬと、彼らはまた先祖よりいっそう墮落して、他の

神々に従い、これに仕え、ひれ伏し、その悪い行いとかたくなな歩みを何一つ断たなかった。

福音（マタイ19章16―22節）

16 さて、一人の男がイエスに近寄って来て言った。「先生、永遠の命を得るには、どんな善いことをすればよいのでしょうか。」17 イエスは言われた。「なぜ、善いことについて、わたしに尋ねるのか。善い方はおひとりである。もし命を得たいのなら、掟を守りなさい。」18 男が「どの掟ですか」と尋ねると、イエスは言われた。『殺すな、姦淫するな、盗むな、偽証するな、19 父母を敬え、また、隣人を自分のように愛しなさい。』20 そこで、この青年は言った。「そういうことはみな守ってきました。まだ何か欠けているでしょうか。」21 イエスは言われた。「もし完全になりたいのなら、行って持ち物売り払い、貧しい人々に施しなさい。そうすれば、天に富を積むことになる。それから、わたしに従いなさい。」22 青年はこの言葉を聞き、悲しみながら立ち去った。たくさんの財産を持っていたからである。

朗読から祈りへ

―遣わされた者―

士師記はヨシユアの死後から預言者サムエルが登場するまでの間の士師の活躍を描いている。士師とは神の声を聞いて召し出されイスラエルの民に神から遣わされ、神の支配を実現していく使命が与えられた者。明日の朗読に登場するギデオンをはじめ、デボラ、アビメレク、サムソンなどの士師の働きが描かれている。

酒ぶねの中で小麦を打っていたギデオンに主の御使いが「主はあなたと共におられる」という言葉とともに現れて言う。イスラエルを救うために「主があなたを遣わす」。ギデオンは答える。「わたしの主よ、お願いします。しかし、どうすればイスラエルを救うことができますしやう。わたしの一族はマナセの中でも最も貧弱なものです。それにわたしは家族の中でいちばん年下の者です」。そう言うギデオンに、主は共にいるから大丈夫。敵を打ち倒すことができる、と言う。

神の選びは神の自由な意志による。神の選びは多くの場合、弱い者を選ぶ。それは神の力は弱い者を通してより強くあらわれるからである。

今年は「司祭年」。来年の六月まで続く。教区司祭を養成する東京と福岡の神学院が合併し、今年度から「日本カトリック神学院」として歩みを始めている。司教団と神学院が出した「養成理念と指針」養成ガイドブック」の第一部の冒頭には次のように記されている。

「神は人類の救いの計画のために、キリストを通して、ある人を特別にお選びになり、教会への奉仕に生涯をささげるよう招かれる。この司祭職への召命は神の計り知れない摂理によるものであり、その選びは神の自由な意志によるものである。神は『世の無学な者』を選び、『地位のある者を無力な者とすするため、世の無に等しい者、身分の卑しい者や見下げられている者を選ばれた』（1コリ27―28）と言われているとおりである。」

士師も預言者も新約時代の使徒たちも、そして現代の司祭も、主から遣わされた者であつて「主」ではないことを再確認しておく必要がある。

弱い者であるから選ばれ、足りない者であ

るから選ばれたことを。主自身が補うために。

―従う者―

主は貧しい者を選んで遣わす。

金持ちの青年がイエスに尋ねる。「先生、永遠の命を得るには、どんな善いことをすればいいのでしょうか。」この青年は「永遠の命」を求めている。そして、掟を守ることでそれを得ることができると思っている。「掟はみな守ってきました。まだ何か欠けているでしょうか」とイエスに言う。「何か欠けている……」。この青年はまだ何かを得ようとしている。まだ何かを持とうとしている。その青年にイエスは「捨てろ」と言う。永遠の命は捨てることで得られる、と。永遠の命は人が自分の力で得るものではない。永遠の命は与えられるもの。主のみが与えることができるもの。

貧しくなければ与えられない。欺瞞と自信に満ち、自分の力に頼る者は弟子になれない。なぜなら、神はその人を使うことができない。神の力を伝えるために遣わすことはできないからである。

最後にイエスは青年に言う。「それから、わたしに従いなさい」と。(M・M・Y)